

《研究ノート》

島嶼集落における社会的かかわり状況と見守り、  
防災、医療体制について

－奄美大島大和村における中高年者調査から－

小窪 輝吉・岩崎 房子・大山 朝子  
田畑 洋一・田中 安平・高山 忠雄

# 島嶼集落における社会的かかわり状況と見守り、 防災、医療体制について

—奄美大島大和村における中高年者調査から—

小窪 輝吉・岩崎 房子・大山 朝子  
田畑 洋一・田中 安平・高山 忠雄

要旨：本研究の目的は奄美大島大和村における中高年者の社会的かかわり状況、見守り体制、災害への備え、医療体制などの現状と課題をアンケート調査により把握し、地域課題の改善に役立てることである。民生委員の協力を得た留置き調査により、40歳以上の1,240人を調査対象とし、928人から回答を得た（回収率74.8%）。

近隣の交流は少し減ってきていた。社会とのかかわりでは女性の方が男性よりも高く、年齢が高くなるにつれ低くなる傾向にあった。自然な形での見守りがなされていたが、高齢になると見守り体制への要求もあった。集落の防災組織がうまく機能しているが、災害弱者や避難などへの対処に課題を残していた。医療体制については診療所への満足がある一方、緊急医療や専門医療への要望が強かった。地域の課題では買い物が不便とかハブの存在など社会的・自然的課題があった。

キーワード：島嶼集落、社会的かかわり、見守り体制、防災体制、医療体制

## 目的

本稿の目的は、島嶼集落における中高年者の日常の社会的かかわり状況、見守り体制、災害への備え、医療体制などの現状と課題をアンケート調査により把握し、地域課題の改善に役立てることである。

調査対象地である大和村は、奄美市名瀬の西方に位置する。大和村には11の集落があり、東シナ海に面した海岸線沿いに点在している。名瀬に近い方の国直、湯湾釜、津名久、思勝、大和浜の東部地区5集落は波静かな思勝湾内にあり土地の人から「ウラウチ」と呼ばれている。西部地区の大棚、大金久、戸円、名音、志戸勘、今里の6集落は東シナ海の荒海に面していて「アラバ」と呼ばれている（大和村誌編纂委員会、2005）。鹿児島県のHPによると、2010（平成22）年の人口は1,765人、うち高齢者は640人で高齢化率は36.3%であり県で5番目の高さである。大和村誌（2010）によると、村の人口は1950（昭和25）年に6,374人あったのが2005（平成17）年には1,932人へと70%も減少した。「ウラウチ」と「アラバ」では「アラバ」の集落の減少率が高い。人口流出の原因は農林漁業の衰退と高度経済成長のほかに、奄美群島復興特別措置法による公共事業と大島紬産業の興隆も指摘されている。たとえば、家族で名瀬に移り住んで夫は土木建設に妻は紬織の仕事に従事するというパターンがみられ、その結果、大和村内の集落人口よりも名瀬の郷友会の人数が多くなっているところもあるという。なお、現在の人口は1,604人（2015年6月30日現在：大和村HP、2015）である。

かつて、漁業では鰹漁、林業では枕木やパルプ用の伐採が盛んだったところもあったが、昭和30年代で終わっ

ている。農業については、サトウキビ栽培と水田稲作が主であった。サトウキビ栽培は大和村が発祥の地とされているが、昭和40年代の後半には製糖工場出荷用のサトウキビ生産は終了している。また、稲作は人口流出による耕作放棄地の増加と米の生産調整により昭和60年代半ばに終焉を迎え、水田は野菜や果樹園芸の畑に変わっている。現在の村の代表的農作物はスモモやタンカンなどの果樹である。これも高齢化により後継者不足が課題となっているところである。(大和村誌編纂委員会、2010)。

著しい高齢化が進む中、村では2011(平成23)年から「住みなれた地域で自分らしく安心して暮らせる村づくり」を理念とした地域づくりを始め、住民主体の地域支え合い活動などに積極的に取り組んでいる。その成果として、10の地域支え合い活動団体が生まれ、住民が主体的に地域の課題に取り組む形ができつつある。

本稿は大和村で実施した中高年者の日常生活実態調査の結果を集計分析することで、離島集落の地域課題を整理することを試みる。

## 方法

本調査は、奄美大島大和村にお住まいの40歳以上の中高年者を対象に「生活と福祉に関する意見」を調べるために実施したものである。調査方法は留置き調査で、大和村保健福祉課および民生児童委員の方々の協力により実施された。

調査対象者は大和村11集落にお住まいの40歳以上の男女1,240人で、そのうち928人から回答を得た(回収率74.8%)。調査内容は、普段の生活状況、生きがい感、見守り活動、災害への備え、医療体制、地域の課題などであった。調査時期は2014(平成26)年2月から3月であった。なお、質問項目への無回答があるため、回答結果の集計における回答者数は質問項目ごとに異なる。

倫理的配慮について、調査用紙に調査の趣旨とともに、回答は自由意志であり拒否しても不利益を被ることがないこと、調査は無記名で個人が特定できないよう統計処理をすることを説明した文書を添付した。また、本調査は所属大学の教育倫理審査委員会の承認を得たうえで実施した。

なお、本報告の集計では、回答者の年代と各質問項目のクロス集計を中心に行った。その際、40歳以上54歳以下を「中年前期」、55歳以上64歳以下を「中年後期」、65歳以上74歳以下を「高年前期」、75歳以上を「高年後期」の4つに分類した。

## 結果

### 1. 回答者の属性

#### (1) 性と年齢

性と年齢の両方に答えた方は878人であった。性別では、男性が45.4%(399人)、女性が54.6%(479人)であり、女性の方が多かった。

年齢について、40歳以上54歳以下を「中年前期」、55歳以上64歳以下を「中年後期」、65歳以上74歳以下を「高年前期」、75歳以上を「高年後期」として分類した。結果、「中年前期」は25.1%(220人)、「中年後期」は23.1%(203人)、「高年前期」は20.7%(182人)、「高年後期」は31.1%(273人)であり、「高年後期」の割合が最も高かった。「中年前期」と「中年後期」を合わせて「中年」、「高年前期」と「高年後期」を合わせて「高年」と2つに分類すると、「中年」は48.2%、「高年」は51.8%であり、ほぼ同数であった。

性と年代でみると、「中年前期」は男女がほぼ同数、「中年後期」は男性の方が女性よりやや多かった。「高年前期」と「高年後期」はいずれも6:4で女性の方が男性よりも多かった。

#### (2) 健康状態

健康状態を「健康である」から「健康でない」の4段階で答えてもらった。全体では回答者878人のうち、「健康である」が24.3%(213人)、「まあまあ健康である」が52.6%(462人)、「あまり健康でない」が16.4%(144

人)、「健康ではない」が6.7% (59人)であり、「まあまあ健康である」人が最も多かった。「健康である」と「まあまあ健康である」を合わせて「健康」、「あまり健康ではない」と「健康ではない」を合わせて「病弱」と2つに分類した。結果、「健康」は76.9% (675人)、「病弱」は23.1% (203人)となり、健康状態が良い人の割合が高かった。

年代別に見ると、「中年前期」から「高年後期」へと高年になるほど「健康」である者の割合が減少していた。年齢が上がるにつれ健康状態が悪い方が多くなっている。

### (3) 世帯状況

全体では回答者869人のうち、「一人暮らし」が21.3% (185人)、「夫婦のみ」が38.2% (332人)、「子供と同居 (二世帯同居)」が25.7% (223人)、「子供と孫と同居 (三世帯同居)」が2.6% (23人)、「その他」が12.2% (106人)であり、「夫婦のみ」の世帯が最も多く、2番目に多いのが「子供と同居」、3番目に多いのが「一人暮らし」であった。

年代別に見ると、「中年前期」で多いのは「子供との同居 (二世帯同居) 世帯」、「中年後期」「高年前期」「高年後期」で多いのは「夫婦のみ世帯」であった。「高年後期」では「一人暮らし世帯」も多かった。

### (4) 世帯の主な収入

全体では回答者866人のうち、「常勤の仕事の収入」が32.2% (279人)、「臨時の仕事の収入」が7.3% (63人)、「年金などの収入」が52.0% (450人)、「その他」が8.5% (74人)であり、「年金などの収入」が最も多く回答者の半数を占めた。年齢別では、「中年前期」は「常勤の仕事の収入」が多く、「中年後期」では「常勤の仕事の収入」と「年金など」が多く、「高年前期」と「高年後期」では「年金など」が多かった。

## 2. 近隣交流の変化

近隣交流の変化について、「非常に増えてきた」に5点、「少し増えてきた」に4点、「増減に変わりはない」に3点、「少し減ってきた」に2点、「非常に減ってきた」に1点を割り当てて得点化し年代ごとに平均値を求めた。

全体の平均得点は2.72点 (SD=0.984) であった。これは「増減に変わりはない (3点)」より低い値であり、近隣の交流が少し減ってきていることを示している。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、年齢の主効果のみが有意であり、年齢が高くなるにつれて近隣交流が減少していると答える傾向にあった ( $F(3,828)=6.64, p<.001$ )。「中年前期」が2.96点 (SD=0.944)、「中年後期」が2.72点 (SD=0.993)、「高年前期」が2.68点 (SD=0.914)、「高年後期」が2.58点 (SD=1.025) であった。下位検定の結果、「高年前期」と「高年後期」の高年者が「中年前期」より「近隣交流が減少してきた」と思っている程度が高かった。

## 3. 社会的かかわり状況について (社会関連性指標)

日常生活状況を調べるために社会との関わりを中心に15項目について質問した。これは安梅 (2000) の社会関連性指標の質問項目から15項目を選んで用いた。社会関連性指標は、「地域社会の中での人間関係の有無、環境とのかかわりの頻度などにより測定される、人間と環境とのかかわりの質的、量的側面を測定する指標」である。

それぞれの質問項目に応じて「ほぼ毎日」～「月1度以下」、「いつもある」～「特にない」、あるいは「とても」～「・・・しない」の4段階で答えてもらった。本報告では、安梅 (2000) と異なり、集計のために、「ほぼ毎日」を4点、「週2度くらい」を3点、「週1度くらい」を2点、「月1度以下」を1点として得点化した。他の質問項目への回答も頻度や程度が高いほど点数が高くなるように得点化した。最も頻度や程度が高いのが4点、最も頻度や程度が低いのが1点になる。

それぞれの項目について得点化して平均値を求めたところ、最も高いのは「テレビを見る」の3.88点 (SD=0.541)、2番目に高いのは「家族・親戚と話す機会がある」の3.65点 (SD=0.807)、3番目は「新聞を読む」の3.59点 (SD=0.982) であった。一方、最も低いのは「地区会・センター・公民館活動に参加する」の1.33

点 (SD=0.575)、2番目に低いのは「ビデオなど便利な道具を利用する」の2.21点 (SD=1.110)、3番目は「本・雑誌を読む」の2.35点 (SD=1.240) であった。身近な人との交流は高いが、情報収集や社会参加が消極的な形でなされている傾向がみられる。

また、それぞれの項目について性と年齢の2要因分散分析を実施した。結果を表1に示す。

#### (1) 家族・親戚と話をする頻度

「家族・親戚と話をする機会はどのくらいありますか。」

回答者857人の平均値は3.7点 (SD=0.801) であり、家族・親戚と話を頻繁にしていた。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、年齢の主効果が有意であった ( $F(3,849)=2.67, p<.05$ )。下位検定の結果、「中年前期」が「中年後期」よりも家族・親戚と話を頻繁にしている、「高年前期」と「高年後期」は両者の中間であった。

#### (2) 家族・親戚以外と話をする頻度

「家族・親戚以外の方と話をする機会はどのくらいありますか。」

回答者855人の平均値は3.5点 (SD=0.824) であり、家族・親戚以外の方と話を頻繁にしていた。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、有意差は見られなかった。

#### (3) 訪ね合いの機会

「誰かが訪ねてきたり、訪ねて行ったりする機会はどのくらいありますか。」

回答者840人の平均値は2.9点 (SD=0.962) であり、訪ね合う機会は週2度くらいであった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、性と年齢の主効果が有意であった (性:  $F(1,832)=17.10, p<.01$ 、年齢:  $F(3,832)=12.61, p<.01$ )。性差については、女性の方が男性よりも訪ね合う機会が多かった。年齢については下位検定の結果、訪ね合う機会の多さは「高年後期」>「中年後期」>「中年前期」であった。「高年前期」は「高年後期」と「中年後期」の中間に位置していた。年齢が上がると訪ね合う機会が増えていることを示している。

#### (4) 公民館活動への参加

「地区会・センター・公民館活動に参加する機会はどのくらいありますか。」

回答者724人の平均値は1.3点 (SD=0.571) であり、公民館活動に参加する機会は3ヶ月に1度くらいで少なかった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、有意差は見られなかった。

#### (5) テレビ視聴

「テレビを見ますか。」

回答者868人の平均値は3.9点 (SD=0.547) であり、テレビを見るのはほぼ毎日であった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、有意差は見られなかった。

#### (6) 新聞購読

「新聞を読みますか。」

回答者864人の平均値は3.6点 (SD=0.980) であり、新聞をほぼ毎日読んでいた。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、年齢の主効果が有意であった ( $F(3,856)=8.79, p<.01$ )。年齢については下位検定の結果、「中年前期」「中年後期」「高年前期」よりも「高年後期」の方が新聞を読む頻度が少なかった。

#### (7) 読書

「本・雑誌を読みますか。」

回答者841人の平均値は2.3点 (SD=1.239) であり、本・雑誌を読むのは週1度くらいに近かった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、性と年齢の主効果が有意であった (性:  $F(1,833)=9.13, p<.01$ 、年齢:  $F(3,833)=15.45, p<.01$ )。性差については、女性の方が男性よりも本・雑誌を読んでいた。年齢については下位検定の結果、「中年前期」「中年後期」「高年前期」よりも「高年後期」の方が本・雑誌を読む頻度が少なかった。

#### (8) 役割

「職業や家事など何か決まった役割がありますか。」

回答者843人の平均値は3.2点 (SD=1.233) であり、職業や家事などの役割がある程度あった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、性と年齢の主効果が有意であった (性:  $F(1,835)=35.46, p<.01$ 、年齢:  $F(3,835)$ )

=13.18,  $p<.01$ )。性差については、女性の方が男性よりも役割があると答えていた。年齢については下位検定の結果、「中年前期」>「中年後期」「高年前期」>「高年後期」であった。「中年前期」が最も役割があり、次いで「中年後期」と「高年前期」が同程度に役割があり、「高年後期」は役割が少なかった。

#### (9) 相談者

「困った時に相談に乗ってくれる方がいますか。」

回答者856人の平均値は3.4点 (SD=0.971) であり、相談に乗ってくれる方は時々より少し多いぐらいであった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、性の主効果が有意であった ( $F(1,848)=28.12, p<.01$ )。女性の方が男性よりも相談者がいる人が多かった。

#### (10) 緊急時の援助者

「緊急時に手助けをしてくれる方がいますか。」

回答者850人の平均値は3.5点 (SD=0.950) であり、緊急時に手助けをしてくれる方は時々より多かった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、性の主効果が有意であった ( $F(1,842)=14.73, p<.01$ )。女性の方が男性よりも緊急時の相談者がいる人が多かった。

#### (11) 近所づきあい

「近所づきあいはどの程度していますか。」

回答者852人の平均値は2.9点 (SD=0.872) であり、近所づきあいの程度は立ち話程度であった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、性と年齢の主効果が有意であった (性:  $F(1,844)=14.83, p<.01$ 、年齢:  $F(3,844)=2.61, p=.05$ )。性差については、女性の方が男性よりも近所づきあいが深いと答えていた。年齢については下位検定の結果、「高年前期」>「中年後期」であり「高年前期」が「中年後期」よりも近所づきあいが深かった。「中年前期」と「高年後期」は両者の中間にあった。

#### (12) 趣味

「趣味などを楽しむ方ですか。」

回答者851人の平均値は2.8点 (SD=0.995) であり、趣味をまあまあ楽しんでいた。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、年齢の主効果が有意であった ( $F(3,843)=8.05, p<.01$ )。下位検定の結果、「中年前期」「中年後期」「高年前期」の方が「高年後期」よりも趣味を楽しんでいた。

#### (13) 便利な道具の利用

「ビデオなど便利な道具を利用する方ですか。」

回答者843人の平均値は2.2点 (SD=1.113) であり、ビデオなどの便利な道具の利用はあまりしていなかった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、性と年齢の主効果が有意であった (性:  $F(1,835)=7.54, p<.01$ 、年齢:  $F(3,835)=71.68, p<.01$ )。性差については、男性の方が女性よりも便利な道具を利用していた。年齢については下位検定の結果、「中年前期」>「中年後期」>「高年前期」>「高年後期」であり、年齢が上がるにつれビデオなどの便利な道具の利用が少なかった。

#### (14) 健康配慮

「健康には気を配る方ですか。」

回答者860人の平均値は3.2点 (SD=0.714) であり、健康への配慮はまあまあであった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、性と年齢の主効果が有意であった (性:  $F(1,852)=6.07, p<.05$ 、年齢:  $F(3,852)=14.83, p<.01$ )。性差については、女性の方が男性よりも健康に配慮していた。年齢については下位検定の結果、「高年後期」>「中年後期」>「中年前期」であった。「高年前期」は「高年後期」と「中年後期」の中間に位置した。傾向として、年齢が上がるにつれ健康への配慮が高くなっていた。

#### (15) 規則的生活

「生活は規則的ですか。」

回答者858人の平均値は3.1点 (SD=0.723) であり、規則的な生活はまあまあであった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、性と年齢の主効果が有意であった (性:  $F(1,850)=23.59, p<.01$ 、年齢:  $F(3,850)=12.21,$

表1 日常生活状況の諸側面における社会的関わり の程度

		平均値	標準偏差	性×年齢の2要因分析	
1. 家族・親戚と話すの機会はどのくらいありますか	性別	男性 3.6	.896	n.s.	
	性別	女性 3.7	.710		
	年齢別	中年前期	3.8	.704	p<.05 中年前期>中年後期 ただし、高年前期と高年後期は両者の中間
		中年後期	3.5	.923	
		高年前期	3.7	.745	
高年後期	3.6	.805			
2. 家族・親族以外の方と話すの機会はどのくらいありますか	性別	男性 3.4	.856	n.s.	
	性別	女性 3.5	.797		
	年齢別	中年前期	3.6	.769	n.s.
		中年後期	3.5	.869	
		高年前期	3.4	.869	
高年後期	3.4	.799			
3. 誰かが訪ねてきたり、訪ねて行ったりする機会はどのくらいありますか	性別	男性 2.7	.970	p<.01 男性<女性	
	性別	女性 3.0	.936		
	年齢別	中年前期	2.5	.911	p<.01 高年後期>中年後期>中年前期 ただし、高年前期は中年後期と高年後期の中間
		中年後期	2.8	.975	
		高年前期	3.0	.914	
高年後期	3.1	.945			
4. 地区会・センター・公民館活動に参加する機会はどのくらいありますか	性別	男性 1.3	.589	n.s.	
	性別	女性 1.3	.555		
	年齢別	中年前期	1.3	.607	n.s.
		中年後期	1.3	.571	
		高年前期	1.3	.498	
高年後期	1.4	.585			
5. テレビを見ますか	性別	男性 3.9	.535	n.s.	
	性別	女性 3.9	.557		
	年齢別	中年前期	3.9	.573	n.s.
		中年後期	3.9	.579	
		高年前期	3.9	.475	
高年後期	3.9	.543			
6. 新聞を読みますか	性別	男性 3.7	.886	n.s.	
	性別	女性 3.5	1.049		
	年齢別	中年前期	3.7	.797	p<.01 中年前期=中年後期=高年前期>高年後期
		中年後期	3.7	.831	
		高年前期	3.7	.876	
高年後期	3.3	1.218			
7. 本・雑誌を読みますか	性別	男性 2.2	1.219	p<.01 男性<女性	
	性別	女性 2.4	1.249		
	年齢別	中年前期	2.7	1.159	p<.01 中年前期=中年後期=高年前期>高年後期
		中年後期	2.4	1.247	
		高年前期	2.4	1.244	
高年後期	1.9	1.198			
8. 職業や家事など何か決まった役割がありますか	性別	男性 2.9	1.290	p<.01 男性<女性	
	性別	女性 3.4	1.146		
	年齢別	中年前期	3.5	.988	p<.01 中年前期>中年後期=高年前期>高年後期
		中年後期	3.2	1.259	
		高年前期	3.2	1.239	
高年後期	2.9	1.315			
9. 困ったときに相談に乗ってくれる方がいますか	性別	男性 3.2	1.065	p<.01 男性<女性	
	性別	女性 3.6	.856		
	年齢別	中年前期	3.5	.911	n.s.
		中年後期	3.3	1.009	
		高年前期	3.3	1.102	
高年後期	3.5	.907			
10. 緊急時に手助けをしてくれる方がいますか	性別	男性 3.4	1.054	p<.01 男性<女性	
	性別	女性 3.6	.838		
	年齢別	中年前期	3.5	.901	n.s.
		中年後期	3.4	.978	
		高年前期	3.4	1.077	
高年後期	3.6	.868			
11. 近所づきあいはどの程度しますか	性別	男性 2.8	.883	p<.01 男性<女性	
	性別	女性 3.0	.849		
	年齢別	中年前期	2.9	.879	p<.05 高年前期>中年後期 ただし、高年後期と中年前期は両者の中間
		中年後期	2.8	.882	
		高年前期	3.0	.777	
高年後期	2.9	.907			
12. 趣味などを楽しむ方ですか	性別	男性 2.8	.979	n.s.	
	性別	女性 2.7	1.006		
	年齢別	中年前期	2.9	.876	p<.01 中年前期=中年後期=高年前期>高年後期
		中年後期	2.9	1.005	
		高年前期	2.8	.923	
高年後期	2.5	1.074			
13. ビデオなど便利な道具を利用する方ですか	性別	男性 2.4	1.130	p<.01 男性>女性	
	性別	女性 2.1	1.084		
	年齢別	中年前期	2.9	.926	p<.01 中年前期>中年後期>高年前期>高年後期
		中年後期	2.4	1.111	
		高年前期	2.1	1.056	
高年後期	1.6	.891			
14. 健康には気を配る方ですか	性別	男性 3.1	.776	p<.05 男性<女性	
	性別	女性 3.2	.652		
	年齢別	中年前期	2.9	.721	p<.01 高年後期>中年後期>中年前期 ただし、高年前期は中年後期と高年後期の中間
		中年後期	3.1	.678	
		高年前期	3.2	.663	
高年後期	3.3	.711			
15. 生活は規則的ですか	性別	男性 3.0	.771	p<.01 男性<女性	
	性別	女性 3.2	.658		
	年齢別	中年前期	2.9	.794	p<.01 高年後期>中年後期>中年前期 ただし、高年前期は中年後期と高年後期の中間
		中年後期	3.1	.680	
		高年前期	3.1	.661	
高年後期	3.3	.683			

$p<.01$ )。性差については、女性の方が男性よりも規則的な生活をしてきた。年齢については下位検定の結果、「高年後期」>「中年後期」>「中年前期」であった。「高年前期」は「高年後期」と「中年後期」の中間に位置した。健康への配慮と同様に、年齢が上がるにつれより規則的な生活を送っていた。

#### 4. 見守り体制

かつて大和村では「ともしび」活動に取り組み、見守り活動を行ってきた。見守り体制が現在どの程度機能しているのか調べるために、見守りを必要とする方がいるか、そして、見守り支援がどのような状態にあるのか質問した。

##### (1) 集落における見守りを必要とする人の存在

見守りを必要とする人が「いる」と答えたのは57.5% (485人)、「いない」と答えたのは12.7% (107人)、「わからない」と答えたのは29.8% (251人)であった。6割近くの方が「見守りを必要とする人がいる」と答えていて、見守り支援の仕組みが求められる状況にあった。

##### (2) 見守りを必要とする人の状態 (複数回答)

回答者491人のうち、見守りを必要とする人の状態として「一人暮らしの高齢者」をあげる方が最も多く412人いた。2番目に多いのが「認知症のある高齢者 (156人)」、3番目が「身体障害のある高齢者 (115人)」であり、以下「身体的な病気のある高齢者 (65人)」と「精神科の病気のある高齢者 (31人)」が続いた。

##### (3) 集落における見守り支援の仕組みの有無

見守り支援の仕組みを「作っている」と答えたのは37.7% (309人)、「作っていない」と答えたのは17.7% (145人)、「知らない」と答えたのが44.6% (366人)であった。見守り支援の仕組みが作られていると認識している人は4割に満たなかった。従前の見守り活動が停滞していることを示している。

##### (4) 見守り支援の仕組みの機能

見守り支援の仕組みがあると答えた方のうち、それが「うまく機能している」と答えたのは49.4% (178人)、「うまくいっていない」と答えたのは8.1% (29人)、「わからない」と答えたのは42.5% (153人)であった。

##### (5) 見守り支援の仕組みがうまく機能していない理由 (複数回答)

見守り支援がうまく機能していないと答えた方は104人であった。機能していない理由として「見守り活動に協力してくれる人がいない」と「見守りの仕組みがよくない」をあげた方がそれぞれ34人、「見守りの負担が大きい」をあげた方が15人、「対象者が見守りを望んでいない」をあげた方が14人いた。

##### (6) 見守り体制についての意見

全体では、現在見守り体制はないが自然な形での見守りがなされていて、民生委員による見守りや自主防災組織による見守りがある、という肯定的意見が多かった。その中で、見守り体制を作ることの必要性や課題・提案に関する意見があり、これは年齢が上がるにつれ増えていた。見守り対象者である「高年後期」では見守りへの感謝の意見と要望・提案の意見が多く見られた。

結果を年代ごとに示す。

①「中年前期 (40歳～54歳)」では、集落の見守りの現状として、「日常の見守り支援体制は作られていないが声かけなど自然な形の見守りがある」「いつも見かける人に会えない場合、民生委員に連絡している」などの記述があった。見守り体制はないが自然な見守りが行われていることを示している。また、「台風時には自主防災組織があり青壮年団や婦人会などが支援活動をしている」という記述もあった。「中年前期」の記述では見守り体制はないが普段から見守りがなされているという現状記述がみられた。

②「中年後期 (55歳～64歳)」では、集落の見守りの現状として、「かつては見守り体制があったが今は行われていない」という記述がある一方「体制はないが民生委員等が見守りをしている」という記述もあった。これには「民生委員に任せた状態なので、班を作って分担して見守りをした方がいい」という提案や「見守り体制に若者が参加してほしい」という要望もあった。また、「地域支え合い活動が始まり今後体制ができてくる、少しずつ形になってくる」という期待もあった。課題として「見守り支援は言うに易く行うに難しいところ



があり具体的案に課題がある」「意識はあるが実行までいかない」などがあつた。

③「高年前期（65歳～74歳）」では、「民生委員が見守りをしている」「体制はないが自然な見守りが行われている」という現状記述があつた。同時に、「見守り体制を作ってほしい」という要望や、「黄色い旗を入口にかかげたらどうか」という提案もあつた。課題としては、「見守り役がいない、老々見守りで負担が大きい」があつた。また、「民生委員の顔も名前も知らない」などの不満もあつた。「高年前期」の記述には見守り体制の現状記述、見守り体制の要望、提案、課題があつた。

④「高年後期（75歳以上）」では、「見守り体制はないが災害時には声かけをしてもらっている」「周りの方から見守ってもらっている」という感謝の記述があつた。一方、「普段はいいが緊急時が心配」「見守りをする側の若者が少なくなっている」「若い人はつながり意識が薄れている」「民生委員の訪問があるが、身内の者も連絡などしたらいい」という課題の指摘があり、「一人暮らしの高齢者など頻繁に見回りに来てほしい」という要望があつた。それに対して、「定期的な語りあいが必要」「見守り班を作ったらいい」という提案があつた。「高年後期」の記述には普段の見守りへの感謝、要望、課題、提案があつた。

## 5. 災害への備え

### (1) 自分の自然災害への備えの程度

自分の自然災害への備えについて10点満点で評価してもらつた。全体の平均値は5.34 (SD=2.776) であり、あまり高くなかつた。性×年齢の分散分析を実施したところ、年齢の主効果に有意差がみられ ( $F(3,771)=3.414, p<.01$ )、性の主効果に差の傾向がみられた ( $F(1,771)=3.459, p<.10$ )。下位検定の結果、「高年後期」の評価点が5.69点 (SD=3.033) で「中年前期」の評価点4.96点 (SD=2.651) よりも高かつた。両者の中間に「高年前期」と「中年後期」が位置していた。これは年齢が上がるにつれて自然災害への備えができていると答える傾向があることを示している (図1)。性差については男性 (M=5.50, SD=.690) の方が女性 (M=5.19, SD=2.846) よりも備えができていると答える傾向にあつた。

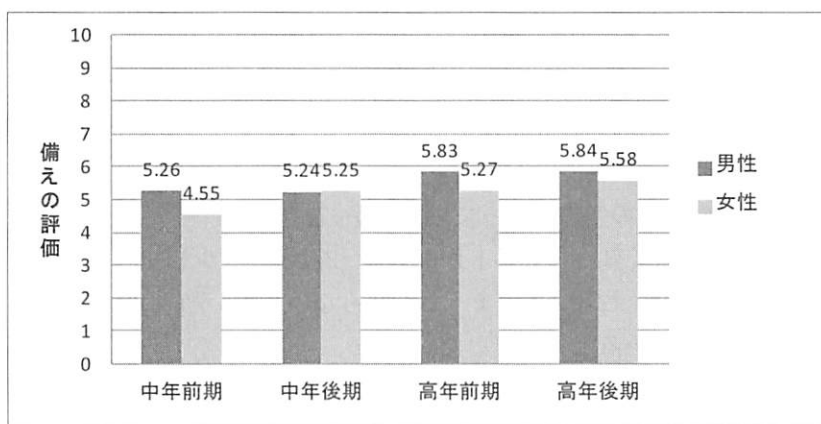


図1 自分の自然災害への備えの評価

### (2) 集落の自然災害への備えの程度

集落の自然災害への備えについて10点満点で評価してもらつた。全体の平均値は6.05 (SD=2.540) であり、自分の備えの程度よりは高かつた。性×年齢の分散分析を実施したところ、性差は見られず、年齢の主効果が有意であつた ( $F(3,716)=2.702, p<.05$ )。「中年前期」は6.23点 (SD=2.455)、「中年後期」は5.90点 (SD=2.317)、「高年前期」は5.55点 (SD=2.585)、「高年後期」は6.31点 (SD=2.720) であり、下位検定の結果、「高年後期」の評価点が「高年前期」の評価点よりも高く、両者の中間に「中年前期」と「中年後期」が位置していた。「高年前期」の方は集落の自然災害への備えができていると答える傾向があることを示している。

### (3) 災害時の緊急連絡手段 (複数回答)

全体ではスマホを含む携帯電話を使うと答えたのが74.4%で、固定電話は48.5%、「その他」が4.5%であり、

緊急連絡手段としては固定電話より携帯電話をあげる方が多かった。年代別に見ると、「中年前期」「中年後期」「高年前期」ではスマホを含む携帯電話を使うと答えた方が多かったが、「高年後期」では固定電話を使うと答えた方が多かった。

(4) 災害情報の入手先 (複数回答)

表2に示すように、全体ではテレビをあげているのが最も多かった。2番目は集落の放送、3番目はラジオ、4番目はスマホを含む携帯電話であった。年齢別でみると、テレビからの災害情報の入手に次いで多かったのが「中年前期」ではスマホを含む携帯電話であり、「中年後期」と「高年前期」は集落放送であった。「高年後期」はテレビよりも集落放送からの情報入手が多く、また家族親族からの情報入手がスマホを含む携帯電話よりも多かった。

表2 災害情報の入手先 (複数回答)

	中年前期	中年後期	高年前期	高年後期	合計
1. 携帯電話(スマホを含む)	②67.1%	④52.7%	④36.9%	21.0%	④43.3%
2. テレビ	①80.8%	①83.1%	①88.3%	②74.2%	①80.8%
3. ラジオ	④52.5%	③56.2%	③55.9%	③46.4%	③52.2%
4. 新聞	34.2%	39.3%	34.6%	29.6%	34.1%
5. 集落の放送	③60.3%	②72.6%	②74.3%	①78.3%	②71.6%
6. 回覧板	0.9%	1.0%	2.8%	3.7%	2.2%
7. 近所の人	21.5%	19.4%	29.6%	29.6%	25.2%
8. 家族親族	23.3%	19.4%	22.9%	④34.8%	25.9%
9. その他	6.4%	7.0%	1.1%	3.4%	4.5%
回答者数	219	201	179	267	866

(5) 車の所有

避難手段として重要な車の所有については、年齢が高くなるにつれ車を持っていない傾向がみられた ( $\chi^2=204.079, df=3, p<.01$ )。特に、「高年後期」の方の車の所有率が低かった。

(6) 家の近辺の知識、災害への備え、避難の手助けの必要度と要援護者の存在

近辺の土壌や地形の知識の程度を「よく知っている」から「全く知らない」まで、災害への各種備え(家の補強、食料備蓄、防災用品の備え、避難所の決定)の程度を「十分にしている」から「全くしていない」まで、避難の手助けの必要度と要援護者の多さを「非常にある」から「まったくない」までの4段階で答えてもらった。

①土壌や地形の知識

「あなたは家の近辺の土壌や地形の知識を知っていますか。」

図2に示すように、全体では「よく知っている」が32.6% (274人)、「少し知っている」と答えたのが33.9% (285人)、「あまり知らない」が25.0% (210人)、「まったく知らない」が8.6% (82人)であった。6割を超える方が家の近辺の土壌や地形を知っていると答えていた。

年代別に見ると、「高年後期」の方が土壌や地形のことを熟知している人が多く、「中年前期」の方が熟知していないと答えていた ( $\chi^2=47.476, df=9, p<.01$ )。

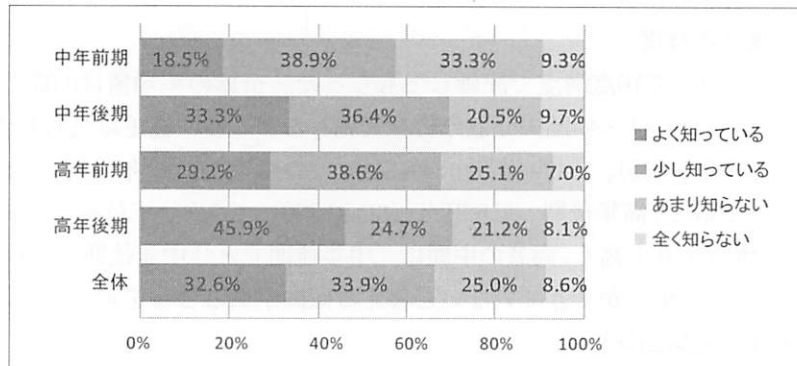


図2 土壌や地形の知識

### ②家の補強

「あなたは災害に備えて家の補強をしていますか。」

図3に示すように、全体では「十分補強している」と答えたのが19.8%（160人）、「少し補強している」が39.3%（318人）、「あまり補強していない」が28.2%（228人）、「全く補強していない」が12.7%（103人）であった。6割が家の補強をしていると答えていた。年代別に見ると年齢が高くなるにつれて家の補強をしていると答える方が多くなっていた（ $\chi^2=67.622$ ,  $df=9$ ,  $p<.01$ ）。

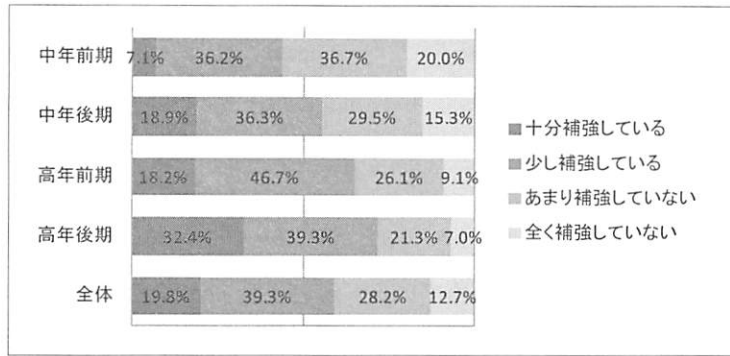


図3 家の補強

### ③食料の備蓄

「あなたは食料品の災害用備蓄をしていますか。」

図4に示すように、全体では「十分備蓄している」と答えたのが5.4%（45人）、「少し備蓄している」が25.7%（214人）、「あまり備蓄していない」が41.1%（342人）、「全く備蓄していない」が27.8%（231人）であった。3割強しか食料品の備蓄をしていなかった。年代別に見ると、「高年後期」の方が食料を備蓄していると答えていた（ $\chi^2=27.775$ ,  $df=9$ ,  $p<.01$ ）。

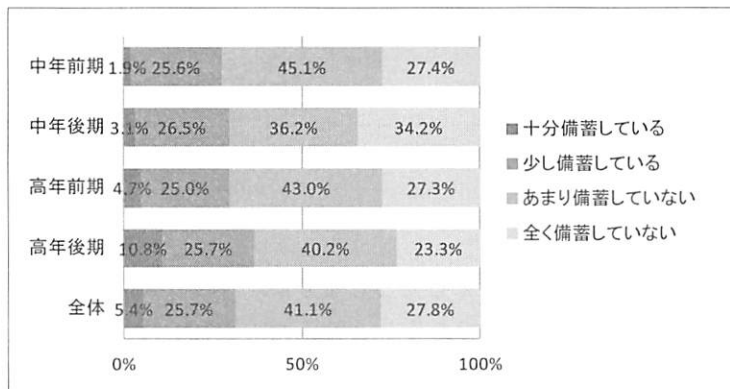


図4 食料の備蓄

### ④防災用品の備え

「あなたは防災用品の備えをしていますか。」

図5に示すように、全体では「十分に備えをしている」と答えたのが4.6%（28人）、「少し備えをしている」が31.1%（259人）、「あまり備えをしていない」が42.5%（354人）、「全く備えていない」が21.8%（181人）であった。何らかの防災用品の備えをしていると答えたのは35.7%に過ぎなかった。

年代別に見ると、年齢が高くなるにつれ防災用品の備えをしていると答える方が多くなっていた（ $\chi^2=47.933$ ,  $df=9$ ,  $p<.01$ ）。

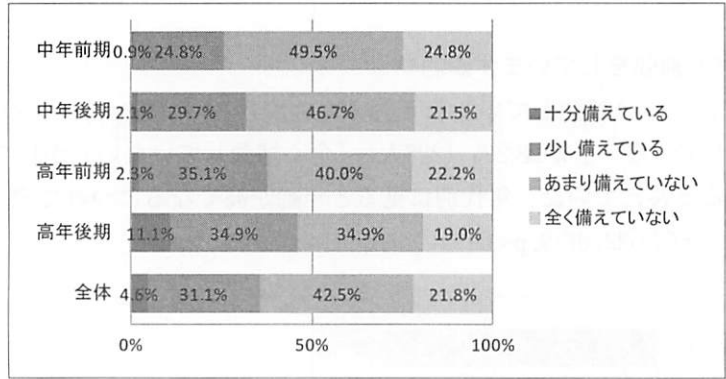


図5 防災用品の備え

⑤避難所

「あなたは避難所を決めていますか。」

図6に示すように、全体では「はっきりと決めている」と答えたのが23.8%（200人）、「ある程度決めている」が53.4%（449人）、「あまり決めていない」が17.1%（144人）、「全く決めていない」が5.7%（48人）であった。8割弱の多くの方が避難所を決めていた。年代別に見ると、高年の方が中年の方よりも避難所を決めていると答えていた（ $\chi^2=25.540$ ,  $df=9$ ,  $p<.01$ ）。



図6 避難所の決定

⑥避難の手助けの必要性

「あなたは避難所に行くのに近隣の手助けを必要としますか。」

図7に示すように、全体では「非常に必要である」と答えたのが12.2%（102人）、「少しは必要である」が18.0%（150人）、「あまり必要ではない」が29.6%（247人）、「全く必要ではない」が40.2%（335人）であった。3割の方が避難の手助けが必要と答えていた。

年代別に見ると、「高年後期」のうち6割を超える方が避難の手助けが必要と答えていて、年齢が下がるにつれ必要性は低下していた（ $\chi^2=219.491$ ,  $df=9$ ,  $p<.01$ ）。

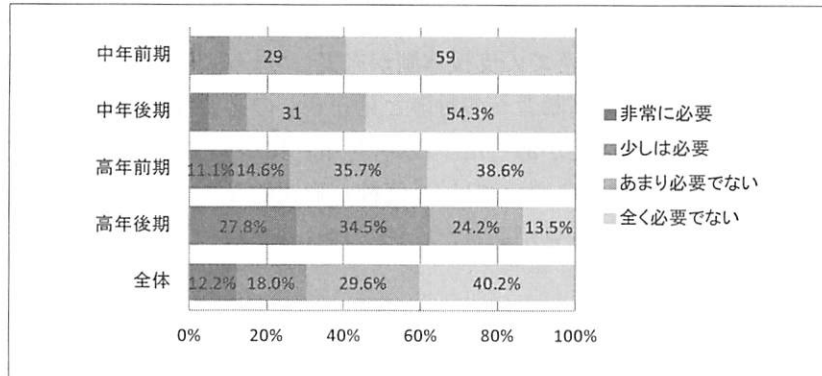


図7 避難の手助けの必要性

### ⑦自力で避難できない人の多さ

集落に自力で避難できない人が「非常にたくさんいる」と答えたのは11.9% (93人)、「少しいる」は75.9% (593人)、「あまりいない」は10.1% (79人)、「全くいない」は2.0% (16人)であった。9割近くが手助けを必要とする方がいると答えていた。回答に年齢差は見られなかった。

### (7) 集落の自然災害への備えについての意見 (自由記述)

全体では、防災組織等がありうまく機能しているという肯定的評価がみられたが、高齢になると災害時の見守りへの要望があった。課題としては避難路や避難所の確保と備蓄の充実が多くあげられていた。水害への対策要望も多く見られた。その他、避難訓練や防災情報提供に関する要望もあった。

結果を年代ごとに示す。

①「中年前期 (40歳～54歳)」では、16件の記述があり、『自主防災組織』に関するものが3件、『備蓄』に関するものが3件、『公民館 (避難所)』に関するものが2件、『避難路』に関するものが2件、『側溝』に関するものが2件、『その他』が4件あった。その中で肯定的評価は2件で、残りの14件は不満・心配・要望であった。

『自主防災組織』については肯定的評価が2件、「機能するか」という不安が1件あった。『備蓄』については「食品、毛布、発電機などの備蓄をしてほしい」という要望があった。『公民館 (避難所)』については「海岸近くにあるので津波の避難所として安全性が心配である」という意見があった。同様に「自宅が海の近くにあるので不安である」というものもあった。『避難路』については「逃げ道がない、高台に行く通路がない」ことを心配する意見があった。『その他』では、「空き家が問題」「リーダーがいない」「不十分」という意見と「家の補修などを集落内のボランティアでするような助け合い活動を作るようにしたらいい」という提案があった。

②「中年後期 (55歳～64歳)」では、23件の記述のうち、『備えへの肯定的評価』に関するものが4件、『備蓄』に関するものが5件、『避難所』に関するものが4件、『水害対策』に関するものが3件、『地形』に関するものが3件、『訓練』に関するものが2件、『その他』が3件あった。

『備えへの肯定的評価』に関する記述では、「万全、だいたいできている」「集落のまとまりがあり心配ない、見守りが機能している」という記述があった。『備蓄』については「食料、毛布、発電機などの備蓄が必要」という意見があった。『避難所』については「避難所である公民館が海の近くにあり津波のときの安全性が問題である」「適切な避難所がない」という問題指摘があった。『水害対策』については「河川改修をしてほしい」「高波対策をしてほしい」「家周りの排水を良くしてほしい」などの要望があった。『地形』については「急斜面になっているので土砂崩れなどが心配」という意見があった。『訓練』については、「不十分、充実してほしい」という要望があった。『その他』については「老朽家屋による他の家屋への被害」の懸念、「集落の備えの周知」の要望、「防災センターは高台に作るべき」という提案があった。

③「高年前期 (65歳～74歳)」では、12件の記述のうち、『備えへの肯定的評価』に関するものが1件、『弱者への対応』に関するものが4件、『水害対策』に関するものが4件、『避難訓練』に関するものが3件、『その他』

が3件あった。

『備えへの肯定的評価』については、「集落での支援体制が充実している」という記述があった。『弱者への対応』については、「障がい者、独り暮らし高齢者への対応と見守り」の必要性和「若者がいないので自分のことは自分で守ろうと考えている」という記述があった。『水害対策』については、「防潮堤」の要望と「排水工事、河川対策」の要望があった。『避難訓練』については、「訓練が形式的なので実践的な訓練が必要」という意見と「集落の訓練が定期的に必要」という意見があった。『その他』については、「避難場所の確保」「食料備蓄」「空き家対策」の要望があった。

④「高年後期（75歳以上）」では、33件の記述があり、『水害』に関するものが9件、『避難所』に関するものが7件、『老朽家屋』に関するものが4件、『見守り』に関するものが4件、『防災備蓄』に関するものが3件、『防災情報要望』が2件、『その他』が4件あった。

『水害』については、「高波や河川氾濫の心配と対策」の要望、「家の周りの排水対策」の要望、「山崩れ」の心配があった。『避難所』については、「避難所の老朽化」、「津波の避難所の確保」、「避難所の周知」の要望があった。『老朽家屋』については、「家が古くて台風時が心配」という記述があった。『見守り』については、「一人暮らし高齢者からの災害時見守り」の要望と「見守りをしてもらっていて安心」という記述があった。『防災備蓄』については、「食料や水などの備蓄」の要望と「防災リュックや防災グッズの入手」の要望があった。『防災情報』については、「早めの情報提供」の要望があった。『その他』では、「防災への備えの評価が不十分である」という記述などがあった。

## 6. 医療体制

### (1) 緊急の医療機関利用

ここ1年の間に緊急で医療機関を利用した方は16.7%（135人）であった。また、年齢が上がるにつれ緊急で医療機関を利用する人がわずかではあるが増えていた（ $\chi^2=9.923$ ,  $df=3$ ,  $p<.05$ ）。

### (2) 緊急受診の理由（複数回答）

緊急で医療機関を利用したと答えた135人のうち122人から回答を得た。「その他」を除いて、最も多いのが「腹痛」の22人、その次に多いのが「発熱」の20人、3番目が「外傷」の19人、4番目が「嘔吐」の14人であった。

### (3) 医療機関の選択理由（複数回答）

緊急で医療機関を利用したと答えた135人のうち126人から医療機関の選択理由について答えてもらった。最も多いのが「かかりつけだから」の65人で、2番目に多いのが「入院・検査設備が充実している」の51人、3番目が「いつでも診療してもらえらるから」の37人、4番目が「家から近いから」の19人、以下「処方される薬がよく効くから」の9人、「駐車しやすいから」の7人、「待ち時間が少ないから」の6人であった。

### (4) 地域の緊急医療機関の受入体制への満足度と不満の理由

全体では「満足している」が34.9%（246人）、「やや満足している」が52.8%（372人）、「不満である」が12.3%（87人）であった。9割近くが満足していた。年代別に見ると、年齢が上がるにつれ満足度が高くなっていた（ $\chi^2=71.205$ ,  $df=6$ ,  $p<.01$ ）。「中年前期」のように若い世代では4分の1が不満であると評価していた。

緊急医療体制に「不満」と答えた方のうち38人から39件の不満理由を複数回答で答えてもらった。最も多い不満が「緊急医療機関まで時間がかかる」というもので19件あった。2番目に多いのが「緊急医療機関がない」「緊急への対応が取れていない」の各4件、3番目が「緊急医療体制が整っていない」「設備と人材が不足している」の各3件であった。不満の主なものは、緊急医療機関が近くにないこと、緊急医療体制が不十分であることの2点であった。

### (5) 地域の医療体制への意見（自由記述）

全体では、地域の医療体制への肯定的評価がある一方で、不満や要望も多く見られた。村内に診療所があり大体のところ満足しているが、専門性や緊急性を要する場合への不安と24時間医療や地域医療への要望があっ

た。その他、診療所や名瀬にある病院への時間距離が長いことへの不安もみられた。

結果を年代ごとに示す。

①「中年前期（40歳～54歳）」では、20件の記述のうち、『満足』が6件、『不満』が7件、『要望』が7件あった。

『満足』に関しては、「健康診断が充実している」「医師や看護師が良くて親切」「医療体制がよく応急処置もしてくれる」「診療所が近くにある」という記述があった。『不満』に関しては、「医療機関が遠い」「診療科が足りない」「土日や夜間の体制が整っていない」などの記述があった。『要望』に関しては、「高齢者などの患者のニーズに合わせて地域医療体制を強化してほしい」「満足というわけではないが診療所があるだけで助かっているでなくさないでほしい」などの記述があった。

②「中年後期（55歳～64歳）」では、15件の記述のうち、『満足』が2件、『不安・不満』が3件、『要望』が7件、『その他』が3件あった。

『満足』に関しては、「診療所が緊急時に対応してくれる」という記述があった。『不安・不満』に関しては、「医師の不在時が不安である」「病院が遠い」「特定疾患に弱い」という記述があった。『要望』に関しては、「奄美市の病院へ早く行けるようトンネルを作してほしい」「医師不在時への対応のために医師2人体制にしてほしい」「緊急医療体制を整えてほしい」「在宅医療をしてほしい」「診療所の会計処理を早くしてほしい」「土曜日の診察をしてほしい」などの記述があった。『その他』に関して、「診療所に夜間受付があるのかわからない」という記述があった。

③「高年前期（65歳～74歳）」では、17件の記述のうち、『安心・満足』が9件、『不満』が1件、『要望』が6件、『その他』が1件あった。

『安心・満足』に関しては、「良い」という評価と「村内に診療所があって安心である」という記述があった。『不満』に関しては、「大きな病気をしたときに近くに病院がない」という記述があった。『要望』に関しては、「24時間医療体制、緊急医療体制を実現してほしい」「救急車の搬送を迅速にしてほしい」「集落内に緊急搬送をする係がほしい」「ネブライザー（吸入器）を診療所で使えるようにしてほしい」「地域密着型の医療をしてほしい」などの記述があった。『その他』では、「診療科目が限られているので奄美市の病院に行っている」という現状記述があった。

④「高年後期（75歳以上）」では、26件の記述のうち、『感謝・満足』が17件、『不満』が5件、『要望』が4件あった。

『感謝・満足』に関しては、「診療所と医師・看護師に感謝する」「今の体制で良い」「充実している」「一般的には困っていない」という記述があった。『不満』に関しては、「診療所や病院が遠い」「医療設備が不十分である」などの記述があった。『要望』に関しては、「往診をしてほしい」「移送時間短縮のためにトンネルを作してほしい」「医療の専門性を望む」という記述があった。

## 7. 地域の問題について（複数回答）

表3に示すように、全体では、地域の問題で最も多いのは「日常の買い物に不便である（51.7%）」で、2番目が「ハブがあるので困る（39.4%）」、3番目が「台風など自然災害に弱い（35.0%）」、4番目が「交際にお金がかかる（34.0%）」、5番目が「一人暮らしや高齢者など老後生活に不安がある（32.6%）」であった。買い物や交際費や老後生活などの社会的課題とハブや台風などの自然的課題の2つが地域の重要な問題となっている。

すべての年代で共通して最も多いのは「日常の買い物に不便である」であった。また、「中年後期」「高年前期」「高年後期」で2番目に多いのは「ハブがあるので困る」であり、「中年前期」で2番目に多いのは「台風など自然災害に弱い」であり、「ハブがあるので困る」は5番目であった。「高年前期」と「高年後期」で3番目に多いのは「一人暮らしや高齢者など老後生活に不安がある」であった。「中年前期」で3番目に多いのは「急病のときの医療体制が不十分である」であり、「中年後期」で3番目に多いのは「交際にお金がかかる」あ

た。

表3 地域で感じている問題（複数回答）

	中年前期	中年後期	高年前期	高年後期	合計
1. 日常の買い物に不便である	①62.2%	①47.9%	①53.3%	①42.9%	①51.7%
2. 医院や病院への通院で、足の確保が困難である	⑤27.6%	28.1%	25.5%	32.5%	28.7%
3. 急病のときの医療体制が不十分である	③35.2%	25.1%	1.2%	19.4%	25.6%
4. 福祉のサービスが不十分である	7.1%	6.6%	7.3%	7.3%	7.1%
5. バスや定期船など交通機関が充実していない	20.4%	20.4%	14.6%	12.0%	16.9%
6. 近隣道路が整備されていない	6.6%	5.4%	5.8%	7.3%	6.4%
7. 集会施設、商店など公共的建物が高齢者には使いにくい	4.6%	3.0%	9.5%	5.8%	5.5%
8. 台風など自然災害に弱い	②36.7%	⑤34.7%	⑤35.8%	④33.0%	③35.0%
9. ハブがあるので困る	⑤27.6%	②46.1%	②44.5%	②41.9%	②39.4%
10. 一人暮らし高齢者など老後生活に不安がある	20.9%	④37.1%	③39.4%	③35.6%	⑤32.6%
11. 趣味や習い事などの学習機会が少ない	7.7%	6.6%	3.6%	2.6%	5.2%
12. 老後の時間をもてあましている	3.1%	7.2%	7.3%	6.3%	5.8%
13. 子育てに不便である	6.1%	6.0%	4.4%	1.6%	4.5%
14. 交際にお金がかかる	④28.1%	③38.9%	④38.0%	④33.0%	④34.0%
15. 人口が減って集落や地域の維持が困難になっている	26.2%	23.4%	32.1%	28.3%	27.4%
16. その他	2.6%	2.4%	1.5%	3.1%	2.5%
回答者数	196	167	137	191	691

## 8. 行政や福祉への意見（自由記述）

全体では、比較的多い記述として、『福祉』に関する肯定的評価と要望・課題指摘があり、『行政』に関する不満と要望それと若干の肯定的評価があった。少数ながら『防災』『人口減対策』に関する要望、『アンケート』に関する意見があった。また、『その他』の個別意見もあった。

結果を年代ごとに示す。

①「中年前期（40歳～54歳）」では、19件の記述のうち、『福祉』に関するものが5件、『行政』に関するものが4件、『防災』『若者の流出』『アンケート』に関するものがそれぞれ2件、『その他』が4件あった。

『福祉』に関する記述には「年寄りや子供にやさしい福祉体制」「高齢者にわかりやすい福祉事業」「在宅介護の充実」「安心して楽しめる老後の実現」「弱者への支援」の要望があった。『行政』に関する記述には「親しみのある対応」「住民全体を対象にした体制づくり」の要望と「相談しても上に止められる」「自分たちの生活の向上ばかり考えている」という不満があった。『防災』に関しては「避難所建設などより具体的な対策」「ライフラインへの対応」という要望があった。『若者の流出』に関しては「住居や職場がないので若者が減少している」という現状記述があった。『アンケート』に関しては「アンケートが多すぎる」「アンケートではなく個別の現場の意見をくみ上げる仕組みが必要」という意見があった。

『その他』に関しては「名瀬へのアクセス整備（トンネル）」「放送による情報提供の充実」「村長のあいさつ放送を流してほしい」という要望と「老朽化した家を直す手段がわからない」という記述があった。

②「中年後期（55歳～64歳）」では、18件の記述のうち、『福祉』に関するものが5件、『行政』に関するものが4件、『人口減少』に関するものが3件、『その他』が6件あった。

『福祉』に関する記述では、「病院や施設の拡充」「医療・福祉・行政の連携」「福祉職員の人間性教育」の要望、「福祉サービスがとても良い」という肯定的評価、「障害者の外出が不自由」という課題指摘があった。『行政』に関する記述では「職員や役場の対応」への不満、「催し日程の広報の迅速」「臨時職員の募集の公明化」の要望があった。『人口減少』では「人口が減って困る」という意見と「産業振興」「仕事の創出」の要望があった。『その他』では「交通の便が悪い」「交際費がかかる」「税金が高い」ことへの不満、「空き家対策」の要望があった。また「高齢者が明るくて良い地域だ」という肯定的評価、「アンケートをすることは良いこと」という意見もあった。

③「高年前期（65歳～74歳）」では、13件の記述のうち、『行政』に関するものが6件、『福祉』に関するものが3件、『その他』が4件あった。

『行政』に関する記述では、「役場職員が信頼できる」「役場職員は仕事を全うしている」という満足の意見と、「役場職員の対応（2件）」「役場職員の仕事ぶり」「地縁・血縁で行政が行われている」という不満があっ



た。『福祉』に関する記述では、「大和村は施設等が充実して住みよい」という満足と、「老老介護と年金生活の状態では住宅改修をしたいのでアドバイスが欲しい」「福祉のことを詳しく知りたい」という要望があった。『その他』では、「いろいろな要望を集落役員が受け付けてくれない」「集落内に店がなくて不便である」「若い世代が礼節にかける」という不満と「アンケートの結果を知りたい」という要望があった。

④「高年後期（75歳以上）」では、19件の記述があり、『福祉』に関するものが13件、『その他』が6件あった。

『福祉』に関する記述では、「村が見守ってくれるから安心」「相談に乗ってくれる」「良くしてもらっている」「介護手当が助かる」「福祉介護への取り組みがいい」という安心と満足の記述があった。また、「一人暮らし高齢者の見守り」「福祉職員の質向上」の要望があった。そのほか「訪ねてくる人もいなくて、、、」という声もあった。

『その他』に関する記述では、「村の活性化を祈っている」「津波対策、避難所の建設」「アンケートの結果を活かしてほしい」などの要望や「意見を書いたら後で困らされる」という声があった。

## まとめにかえて

本稿は、2014（平成26）年2月から3月にかけて奄美大島大和村の中高齢者を対象に実施した調査結果を集計したものである。調査対象者は大和村に居住する40歳以上の1,240人で、回答者数は928人（回収率74.8%）であった。調査内容は社会的かかわり状況、見守り体制、災害への備え、医療体制、地域の課題などであった。

### 1. 回答者の属性

性と年齢の両方の質問に回答した方は878人であり、性別では、女性の方が男性よりもやや多かった。年代別では、64歳以下の「中年者」と65歳以上の「高年者」はほぼ同数であった。健康状態では、健康な方が多かったが、年齢が上がると病弱な方の割合が少しずつ増えていた。世帯状況では、「中年前期」で多いのは『子供との同居（二世帯同居）世帯』、「高年後期」「高年前期」「高年後期」で多いのは『夫婦のみ世帯』であった。「高年後期」では『一人暮らし世帯』も多かった。世帯の主な収入では、「中年前期」は『常勤の仕事の収入』が多く、「高年後期」では『常勤の仕事の収入』と『年金など』が多く、「高年前期」と「高年後期」では『年金など』が多かった。

### 2. 近隣交流の変化

近隣の交流は少し減ってきていた。なかでも高年者が「中年前期」より『近隣交流が減少してきた』と思っている程度が高かった。

### 3. 社会関連性指標

全体的に身近な人との交流は高いが、情報収集や社会参加が消極的な形でなされている傾向がみられた。

身近な人との交流については、家族・親戚および家族・親戚以外の方とも話を頻繁にしていた。誰かを訪ね合う機会は週2度くらいであった。訪ね合う機会は女性の方が男性よりも多く、年齢が上がるとその機会が増えていた。

近所づき合いの程度は立ち話程度であった。女性の方が男性よりも深い近所づき合いをしていた。また、「高年前期」が「高年後期」よりも深い近所づきあいをしていた。

相談に乗ってくれる方や緊急時に手助けをしてくれる方は『時々いる』と『いつもいる』の中間くらいだった。相談・緊急時の援助は女性の方が男性よりも多かった。

職業や家事などの役割はある程度持っていて、健康への配慮と規則的な生活はまあまあであった。役割や健康配慮・規則的な生活は女性の方が得点が高かった。役割については若い年代の方が得点が高かったが、健康配慮と規則的な生活は高齢世代の方が得点が高かった。

テレビをほぼ毎日見て、新聞をほぼ毎日読んでいた。新聞については「高年後期」があまり読むことが少なかった。本・雑誌を読むのは週1度くらいに近かった。本・雑誌については女性の方が男性よりもよく読んでいて、「高年後期」があまり読むことが少なかった。公民館活動に参加する機会は3ヶ月に1度くらいで少な

かった。

趣味は全体としてはまあ楽しんでいて、「高年後期」はあまり楽しんでいなかった。ビデオなどの便利な道具はあまり利用していなかった。これは男性の方が女性よりもよく利用していて、若い年代ほど利用する傾向があった。

#### 4. 見守り体制

6割近くの方が「見守りを必要とする人がいる」と答えていて、見守り支援の仕組みが求められる状況にあった。見守りを必要とする人は「一人暮らしの高齢者」「認知症のある高齢者」「身体障害のある高齢者」であった。見守りが機能していない理由は、「見守り活動に協力してくれる人がいない」と「見守りの仕組みがよくない」であった。

また、現在見守り体制はないが自然な形での見守りがなされている状況にあった。しかし、高齢者では見守りへの感謝がある一方、見守り体制を作ることが必要性であるという意見があった。

#### 5. 災害への備え

自分の自然災害への備えの評価はあまり高くなかった。集落の自然災害への備えの評価は自分の備えの評価よりは高かった。

災害時の緊急連絡手段は、全体ではスマホを含む携帯電話が多かったが、「高年後期」では固定電話の利用が多かった。災害情報の入手先は全体ではテレビが最も多かったが、2番目に多いのは「中年前期」ではスマホを含む携帯電話であり、「中年後期」と「高年前期」は集落放送であった。一方、「高年後期」はテレビよりも集落放送からの情報入手が多かった。また、車の所有は年齢が高くなるにつれ少なくなっていた。

災害への備えについて、家の近辺の土壌や地形では、6割を超える方が「知っている」と答えていた。「高年後期」の方が土壌や地形のことを熟知している人が多く、「中年前期」の方が熟知していないと答えていた。家の補強では、6割が「家の補強をしている」と答えていた。年代別に見ると年齢が高くなるにつれて家の補強をしていると答える方が多くなっていた。食料の備蓄では、3割強しか食料品の備蓄をしていなかった。年代別に見ると、「高年後期」の方が「食料を備蓄している」と答えていた。防災用品の備えでは、「何らかの防災用品の備えをしている」と答えたのは35.7%に過ぎなかった。年齢別に見ると、年齢が高くなるにつれ「防災用品の備えをしている」と答える方が多くなっていた。避難所では、8割弱の多くの方が避難所を決めていた。年齢別に見ると、高年の方が中年の方よりも避難所を決めていると答えていた。避難の手助けの必要では、3割の方が「避難の手助けが必要」と答えていた。年代別に見ると、「高年後期」のうち6割を超える方が「避難の手助けが必要」と答えていた。自力で避難できない人がどの程度いるかについては、9割近くが「手助けを必要とする方がいる」と答えていた。

防災について、防災組織等がありうまく機能しているという肯定的評価がみられたが、高齢者からは災害時の見守りへの要望があった。課題としては避難路や避難所の確保と食料や防災用品の備蓄の充実が多くあげられていた。水害への対策要望も多く見られた。その他、避難訓練や防災情報提供に関する要望もあった。

#### 6. 医療体制

緊急で医療機関を利用した方は16.7%であった。年齢が上がるにつれ緊急で医療機関を利用する人が増えていた。地域の緊急医療機関の受入体制については9割近くが満足していた。高年世代では満足度が高かったが、若い世代には不満も見られた。緊急医療体制への不満の理由としては、「緊急医療機関まで時間がかかる」「緊急医療機関がない」「緊急への対応が取れていない」などがあった。

地域の医療体制については、肯定的評価がある一方で、不満や要望も多く見られた。村内に診療所があり大体のところ満足しているが、専門性や緊急性を要する場合への不安と24時間医療や地域医療への要望があった。その他、診療所や名瀬にある病院への時間距離が長いことへの不安もみられた。

#### 7. 地域の問題

地域の問題で多かったのは、買い物や交際費や老後生活などの社会的課題とハブや台風などの自然的課題の2つであった。

地域の問題に関して、比較的多い意見として、福祉に関する肯定的評価と要望・課題指摘があり、行政に関する不満と要望、それと若干の肯定的評価があった。少数ながら防災と人口減対策に関する要望、アンケートに関する意見があった。また、その他の個別意見もあった。

謝辞 本調査にご回答いただいた高齢者の皆様、調査実施にご協力いただいた民生委員児童委員の皆様ならびに関係機関の皆様に感謝申し上げます。

付記 本研究はJSPS科研費23330190の助成を受けた。

#### 文献

- 安梅勲江 (2000). エイジングのケア科学—ケア実践に生かす社会関連性指標— 川島書店  
大和村HP (2015). 「6月30日現在の人口・世帯数」 (<https://www.vill.yamato.lg.jp/update/207.asp> : 2015.7.29)  
大和村誌編纂委員会 (2005). 大和村の民俗 大和村誌資料集2 大和村  
大和村誌編纂委員会 (2010). 大和村誌 大和村

# Social Interaction, Supporting System, Disaster Prevention Measures, and Medical System of an Island Village

: A survey of the middle-aged and elderly persons living in Yamato Village of Amami Oshima

Teruyoshi KOKUBO, Fusako IWASAKI, Asako OYAMA,  
Yoichi TABATA, Yasuhira TANAKA, Tadao TAKAYAMA

The purpose of the study was to assess the present state of the social interaction, the supporting system, the disaster prevention measures, and the medical system in Yamato Village of Amami Oshima island. A questionnaire was personally delivered to 1240 residents of 40-year-old and above and later picked up by commissioned welfare volunteers. The number of people who responded to the questionnaire was 928 and the rate of collection was 74.8%.

Neighborhood interaction decreased a little. Social interaction of women was higher than men. Social interaction of the elderly was lower than the younger. Although there were spontaneous watch activities in a natural way, the elderly hoped to have the local supporting system for them. The voluntary organizations for disaster prevention were well functioned, but there remained challenges of the measures for the vulnerable people and the emergency evacuation. With respect to the medical system, there was satisfaction with the community clinic, but on the other hand, there remained wishes regarding emergency medical system and specialized medical service. There were also social and natural problems that the shopping was inconvenient, and that the poisonous snake harmed people, and so on .

**Key Words:** Island villages, Social interaction, Supporting system, Disaster prevention measures, Medical system